



企業編



株式会社ミナミダ 大分工場

国見町向田2555番地2
開設 平成3年11月 従業員 59名

株式会社ミナミダは、鍛造業の盛んな東大阪市で、ネジや釘などを製造する

工場として誕生し、冷間鍛造部品を製造することとで事業を拡大してきました。1980年代後半には自動車部品業界に参入するため、新たな工場の開設場所を全国で探していました。その中で、今後多くの自動車会社が九州に進出してくる見込みがあり、加えて熱心に誘致をしてくれたことから、国見町に工場を開設することになりました。開設当時、工場の建築面積は約2,310㎡でした。しかし、長年の鍛造業で培ってきた長ネジを製造する技



▲第一工場の様子

術と太ネジを製造できる設備も評価され、新たな自動車関連部品も受注できるようになりました。また、製造した自動車部品のほとんどを関西方面に出荷しており、竹田津港から徳山までフェリーを利用することで、輸送コストを抑えて事業が拡大しました。今では、3棟の工場が建ち、約4,440㎡にまで拡張することができました。



▲ミナミダの製品

ミナミダは自動車部品の製造が事業売上の約85%を占める中で、大分工場はその半分以上を製造しており、主力工場となっています。しかし、自動車会社の生産拠点が海外に移り、現地で部品を調達するようになったことから、国内の需要は減少してきています。そこで、2012年にタイ工場を開設し稼働させました。しかし、自動車会社の生産拠点はすぐに移っていくので、その流れに乗り遅れずに新たな生産拠点を探していきます。そして、国内では、部品の生産拠点を徐々に大分工場に集約し、仕上げ加工などを本社で行うなど生産効率の向上を図っていく計画を立てています。これから大分工場の重要性が増々高まっていくので、国東市に根差した地域に親しまれる企業を目指して頑張っていきたいと思います。



▲鍛造機の調整作業の様子



▲検査・梱包作業の様子

認定 農業者編



横山 克己さん 涼子さん

武蔵町古市
平成9年からご夫婦で始める

横山克己さんは、大阪市内の金融機関に勤務していましたが、常々子ども

が高校に入学する前に大分県内に戻りたいという想いがあり、合せて勤続25年目と仕事の区切りもついたことから帰郷することを決意しました。ちょうどその頃大分県が新規就農者を募集していました。色々な作物の中で、周年栽培ができる利点からこねぎを選出し武蔵町に移住することにしました。

こねぎ栽培を始めて5年間は安定した収穫がありました。6年目から急に生育が悪くなり収穫量が極端に減少しました。また、この頃は子どもの大学進学と重なったこともあり、生活も苦しかったそうです。しかし、不作の原因が連作障害と分かり、土壌改良をした結果、徐々

に収穫量も増えていきました。そこで、ビニールハウスを増やしていき、今では当初の2倍の42アールまで耕作面積を拡大することができました。

克己さんは、武蔵ねぎ生産部会の副会長として県内のこねぎの統一ブランド化と部会設立に尽力してきました。その結果、平成20年7月には大分味一ねぎ生産部会が発足し、現在は部長を務めています。



▲調整作業の様子



▲洗浄作業の様子

克己さんは、常々新規就農者が土づくりやこねぎの品質向上に作業時間をあてるために、こねぎの出荷のための調整作業を軽減することができないかと考えていました。それは、外側の皮を剥ぎ規格を揃えたりする調整作業が、全体の作業時間の内7割くらいを占めていたからです。そのような中、武蔵町に共同調整場が完成したことがとてもうれしかったそうです。奥さんの涼子さんへは「自分のわがままに黙って付いて来てくれた妻に感謝しています」と笑顔で話していました。また、涼子さんは、「これまで



▲共同調整場

で苦労もありましたが、今は遊びに来てくれる孫達、自分達の作った野菜を喜んで食べてくれるのが、何よりも楽しみです。これからも夫と一緒に、品質の良いこねぎを育てていきたいと思えます」と話していました。

林業・水産業編



▲左から義兄の井上敬夫さん、光永和男さん、絳子さん、姉の井上順子さん

光永 和男さん 絳子さん

国東町見地
10年前から本格的にシイタケ栽培に取り組む

光永和男さんは、大分県椎茸農業協同組合に40年間勤務し、県内各支部で販

売や流通の仕事に携わってきました。シイタケ栽培に取り組むきっかけは、定年となる4年前に地元国東支部に異動し、知人のシイタケ農家にシイタケの原木を購入するように勧められたこと、国東市が60歳までの新規就農者に対して、乾燥機購入の補助制度を始めたことからでした。そして、定年退職後に本格的なシイタケ栽培ができるように、徐々に原木となるクヌギの木を購入し所有する国東町見地の山を整備しました。奥さんの絳子さ



人は、長年住んでいた別府市からご主人の実家の見地に戻ってみると、シイタケ栽培ができる状態になっていて、とても驚いたそうです。和男さんは、職員時代にシイタケ栽培の研修を受けていたことやシイタケ農家の作業も良く把握していたこともあり、自分ならシイタケ栽培は大丈夫と考えていました。しかし、実際に自分で栽培してみると、傾斜地での作業やホダ木の重さなど改めてシイタケ栽培の大変さを実感しました。そのような中、地元のシイタケ農家の皆さんから助言や協力をいただいたことで栽培のコツを掴み、今では年に10万コマをコマ打ちするようになり、ホダ場も50アールまでに拡大しました。

絳子さんは、「私が知ったときには、後には戻れない状態になっていて、シイタケ栽培を手伝うことになりました。しかし、今では、夫の姉夫婦も作業を手伝ってくれており、山で食べるお弁当や休憩時におやつを食べながらおしゃべりすることが何よりも楽しいです」。和男さんは、「椎茸農協に勤めていたので、シイタケの品質を見抜く力は誰にも負けない自信があります。あとは、納得のできる品質のシイタケを自分で栽培できるかだと思っています。国東には、素晴らしいシイタケ農家が数多くいます。品評会で入賞するのはとても難しいですが、ここ2、3年の内になんとか上位に入れるようなシイタケを育てたい」と語っていました。

